



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## やる気のもとを尋ねてみると

「さあ、行くよ。」「こっちにおいでよ。」何人もの子が声をかけるが、その子は固まって動かなかった。よほどいやなことがあったのだろうか、あるいは、このあとの活動が自分にはできないからいやでしょうがない、といったようなことなのだろうか。

と、そこへ担任が近づいてきた。そして、おやまとばかりにしゃがみ込み、耳元で一言二言ことばをかけた。途端に立ち上がって、先ほどまで声をかけてくれていた子どもたちのところへ向かった。子どもたちは、わいわいにぎやかに、そして笑顔であたたかくその子を迎え入れた。

なんともあざやかなシーンである。

後で、その担任にどういうことだったのか、そして、何をささやいたのか尋ねてみた。すると、なんのことはない、至って単純なことだった。

その子は、その時間、なかなか捕まえられなかったバッタを、やっとの思いで捕まえることができ、上機嫌だったという。虫かごに入れて、みんなに見せていたのだが、自分の不注意から虫かごのふたが開いてしまって、バッタが逃げていったらしい。ちょうどそこで教室へ戻ることになったのだが、なんとも悔しく、そして気持ちの切り替えがうまくできず、固まったのである。

担任がささやいたのは、「あとで、いっしょに取りに行かない？ね！」だった。

予期せぬ不運は、時に人を孤立させる。バッタが逃げたこと、捕まえる時間がなくなったこと、みんなからあきらめろとばかりに、せき立てられたこと…いくつものいやなことが一度にやってきたのだから、その子の気持ちもよくわかる。

沈んだ気持ちを整理し、やる気を起こすことができたのは、担任がその子の心境をよく理解して、ことばかけができたからだと言える。このあと教室に戻れば、その子にとっては、ひよっとするといやな勉強をすることになるのかもしれない。しかし、そんなことより、お昼休みの楽しみが勝っているとその子は了解できたのだろう。さらによかったのは、周りの子どもたちの姿勢である。仲間のつらい気持ちをよく理解し、喜んだり、悲しんだりすることができる子どもたちに育っているのである。一つひとつの出来事を、なんとか乗り越えていくことで、少しずつ成長していく子どもたちに拍手を贈りたい。